(一)元服の意とも敍爵の意ともいう。(二)領有する意とも知る意ともいう。(三)縁があつて。(四)鷹狩。(五)生めく。若々しく美しい。(六)女きようだい。(七)思いがけず。「はしたなく」にかかる。(八)「中途半端で」の意であるが、こゝでは「故里に似合わしくない有様で」の意。(九)さびれた舊都。(一〇)ぼうつとしてしまつた。(一一)この「の」はやゝ不審。強いて主格助詞とするなら、「やる」の下に「ことよ」を補つて解くか。(一二)貴族が狩の時に着た服。後には通常服にも用いた。(一三)裾にじかに書いたとする説と、裾を歌に添えたとする説とがある。(一四)陸奥國信夫郡の名產の摺衣とする説と、忍草(のきしのぶ)の形狀を紫又は種々の色で摺りつけた衣とする説及びその兩説あわせた説などがある。(一五)若い紫草(紫色の根の皮をしぼつて染料とする)で染めて作つた摺衣。(一六)春日野の若紫」は「すり衣」を引出す序詞。(一七)以上は「しのぶ」の縁で「しのぶのみだれ」を引出す序詞。(一八)忍ぶもぢずりの衣(しのぶを信夫の里の意でないとすれば、若紫で忍ぶ草の模様をすり出したあるのように、私のあなたを思つて亂れる心は限が知られない。

〔一段〕むかし、をとこ、初冠して、奈良の京、春日の里にしるよしして、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男かいまみてけり。

狩姿

羽鷹は矢　篠巻節は弓
(子帽子、又白丁烏帽子)立烏帽子塗籠

おもほえず、古里にいとはしたなくてありければ、心地まどひにけり。をとこの著たりける狩衣の裾をきりて、歌を書きてやる。その男、しのぶずりの狩衣をなむ著たりける。

春日野のわか紫のすり衣しのぶのみだれかぎり知られず

となむ、おひつぎていひやりける。ついで面白きことと

(一)以下「心ばへなり」まで後人の註が竄入したかも知れない。この歌は少異はあるが、古今集戀四に河原左大臣の作としてみえる。「陸奥の」は陸奥に信夫の里というのがあることから「忍ぶもぢずり」の序として用いたものとみることができるが、鎌倉時代の吾妻鏡に「信夫毛地摺十端」とあるのなどを參考すると、信夫の里特產説も捨てがたくなる。(二)「もぢずり」即ち亂れ模様に摺ること。(三)あなた以外の誰故に戀に心が亂れそめた私ではないことですのに。(四)すばやい(こざかしいと解く説もある)風流。(五)平安京。(六)朱雀大路から東を東京、西を西京という。(七)獨身。(八)「けるらし」の約。「らし」は或根據に立つての推量。こゝではその根據は示されていないが、然るべきそれがあることを作者は暗示している。(九)誠實な男。(一〇)「語らふ」は話しこんで自分の意に從わせてしまうような意で、男女情をかわす意に用いる。(一一)何をさすかやゝ疑わしい。まめ男だのに、夫のあつたらしい女に「おきもせずぬ云々」の歌をよんでやつたのは、どういうつもりだつたのかの意だと解く説がある。(一二)しよぼ〳〵。(一三)けさから降りつづいている春の長雨を、春の時節の物として、見るともなく見つめて暮してしまつた。「眺め」に「長雨」がかけてある。この歌は古今、戀三に業平作としてみえる。

もや思ひけむ。

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑにみだれそめにしわれならなくに

といふ歌の心ばへなり。むかし人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

〔二段〕むかし、男ありけり。奈良の京ははなれ、この京は人の家まだまだらざりける時に、西の京に女ありけり。その女世の人にはまされりけり。その人、かたちよりは心なむまさりたりける。ひとりのみもあらざりけらし。それをかのまめ男、うち物語らひて、かへり來て、いかゞ思ひけむ、時はやよひのついたち、雨そぼふるにやりける。

おきもせずねもせで夜をあかしては春のものとて眺め暮しつ